

本校の研究

1 研究主題

考えを深化させる対話力～基礎学力と「ことばの力」の向上～

2 目指す生徒像

自分の考えを伝え、相手の思いを受け止め、認め合える生徒

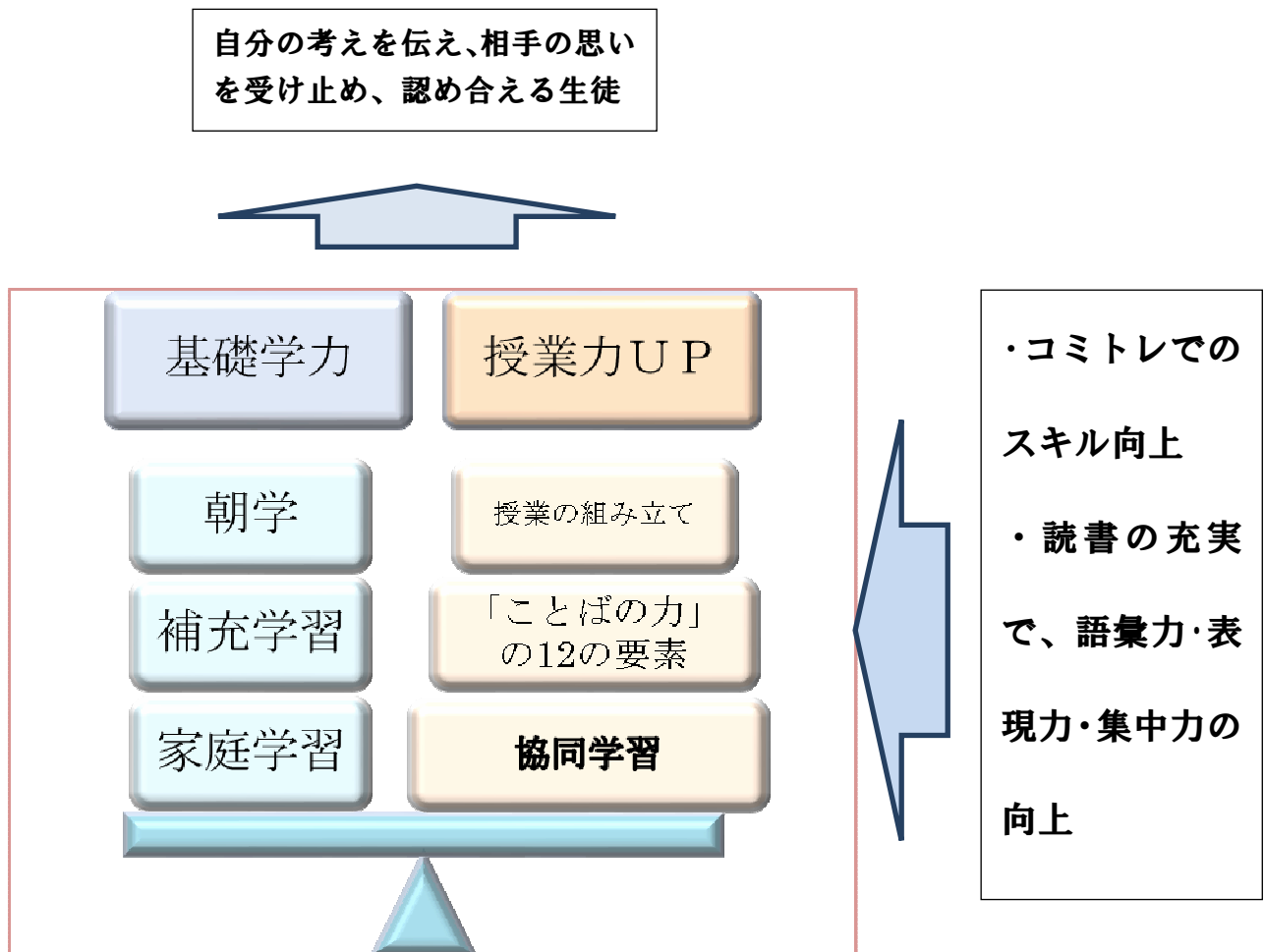
3 生徒につけたい力

- ① 自分の持てる知識を統合して「考える力」
- ② 考えを的確に「伝える力」
- ③ 相手の思いをくみながら「聞き取る力」
- ④ 言語活動を通して、「相手の良さを認め合い、自分の視野を広げる力」

4 研究仮説

- ・基礎学力の向上は、自分の考えを持ち、的確に伝える力を伸ばすであろう。
- ・「ことばの力」を育む12の要素を意識した授業展開は、「豊かな言語活動」の充実につながり、生徒の考えを深めることにつながるであろう。

5 研究の概要図



6 主題設定の理由

本校が、コミュニケーション力の向上を目指して、コミトレに取り組んで8年、協同学習に取り組んで7年が経過した。長年の取り組みの結果、昨年度卒業生の大きな変容といううれしい成果も得ることができた。

しかし、昨今、読み書き・計算といった基礎的な学力や生活体験や読書経験の不足が原因と考えられる語彙力の低下が大きな課題となってきた。このような基礎的な学力の低下は、本校が目指す言語活動の充実にとって大きな足かせになるのではないかという危惧が生まれてきた。

そこで、本年度は、従来の「ことばの力」を育む12の要素を意識した授業展開を行うことはもちろんであるが、その言語活動を支える基礎学力の充実にも力を入れることとした。アップした基礎学力を使い、「**自分の考えをもち**」、その考えを「**的確に伝える**」ことで、互いに深い話し合いができ（「対話力」）、「**認め合い**」、向上し合える学習集団作りを目指すこととした。

7 主題に迫るために

1) 基礎学力の充実

生徒に基礎となる学力をつけるため、次の3点を重点に取り組むこととする。

● 家庭学習の習慣化

本校の生徒は、家庭学習の時間がほとんどとれていないことが、全国学力学習状況調査から明らかとなっている。塾に可用性とも多く、帰宅後の多くの時間を塾に割いている状態である。しかし、塾以外に家庭でいわゆる「自学自習」がほとんどできていない状況にある。そこで、本年度は、1・2年生を対象に、自主学习ノートを使っての、家庭学習を毎日の課題とすることにした。これを持って、家庭学習の時間の確保と同時に、自分が今必要としている学習は何かを自分で考え、実行する習慣を身につけさせたいと考えている。

この項目の達成については、学校だけでなく保護者への協力も呼びかけ、今、生徒が取り組んでいることを「見える化」し、連携を取っていかねばならない。そのためにも、昨年度作成した「家庭学習のすすめ」を活用する。

● 補充学習の充実

「学習の仕方が分からない」という声をよく耳にする。そこで、単なるプリント学習というような補充学習ではなく、学習の仕方につながる補充学習の充実に努めたいと考えている。時期としては、定期テスト発表中、長期休業中を基本に考えている。

● 朝学

週二日の朝学では、「読み・書き」「計算」を中心に行う。ただ、書き取り練習や計算練習をしていても、生徒のモチベーションは上がらないと想定されるので、本年度は、1学期は漢字練習を行い、夏休み後半の漢字検定に1・2年生全員が受験することにした。受験級は自分の力に応じた級を設定し、漢検合格を目標に朝学に取り組む。また、2学期からは、計算を主眼にした数学検定にチャレンジさせることで、学習意欲の喚起を図ることとした。

● 読書習慣の定着

週2回、月・火曜日の朝学活で15分間の読書の時間をとり、読書週間の定着をはかる。読書記録カードの活用で、各自の読書の軌跡が見えるようにする。

2) 「ことばの力」を育む12の要素と協同学習を基盤においた授業展開（授業力アップ）

活動の段階		ことばの力を育む12の要素
PLAN	企画	1 見通しを持つ・計画を立てる
	実行	2 聴く・読む・看るを通して情報を集める
DO	思考 判断	3 予想する・推論する・想像する
		4 情報を比較・分類する
		5 取捨選択する・分析する
		6 具体化する・抽象化する
		7 関連づける・構造化する
	表現	8 言語表現を図（数式）に表す
		9 要約する
CHECK	チェック	10 的確に報告する・聞き取る
		11 共感的または批判的に聴き、話し合う
		12 振り返りをする・評価する

「ことばの力」を育む12の要素

- 「ことばの力」を育む12の要素を意識した授業の組み立て
 教科または単元計画において、以下の表の12の要素に着目し、重点的に取り入れる要素を絞り、授業展開の中でも有効に活用していく。このことにより、授業の中での言語活動が焦点化され、効果が増すと考えられる。
- 授業の流れを「見える化」する
 授業のねらい、流れ（手順）、ゴールの形が生徒にもわかりやすいように示すことで、振り返りも効果的になると考えられる。特に、話し合い活動や共同作業、プレゼンを授業に取り入れる場合、何を、どのように話し合い（情報を集め）、発表はどのような形で行うのかを明確に示して授業を進めることで、生徒の理解も深まると予想される。
- 協同学習を取り入れた授業展開
 「ことばの力」を育む12の要素を意識して授業に取り入れ、授業の流れを明確に示して、授業を組み立てることは、協同学習を進める上で大変有効なことである。「ことばの力」を育む12の要素を意識することで、どんな言語活動を行うのかがはっきりとし、授業の流れを「見える化」することで、何を学ぶのかが生徒にも見えてくる。後は、それをどう学ぶのかである。そこで、クローズアップされるのが、「協同学習」である。ときには、個人でときには小集団で、そしてときには、全体で、効果的な学習形態を取りながら、みんなで一つの学習課題に立ち向かうという意識を持たせ、「自分の考えを伝え、相手の思いを受け止め、認め合認め合う」場を意図的に設けることが必要である。そうすることで、生徒は自分の役割を意識し、伝え合うことの大切さを実感しながら、考えを深めていくことができるであろうと期待している。

3) 教科横断型授業の実践

「コミュニケーション能力の向上」と並行して本校が取り組んできたものに「教科横断型授業」の研究実践がある。これまで、いくつかの横断型授業のカリキュラムを開発・実践してきたが、今後も連携可能な教科において、実践研究を続けて行く考えである。

これまで、実践してきたものは以下の通りである。

- ア 国語・社会 「和歌山宣伝隊」
- イ 保健体育・理科 「健康と生活環境」
- ウ 国語・理科 「脳の不思議」
- エ 数学・理科 「二次関数と物体の落下速度」
- オ 国語・美術 「鑑賞文を書く」

4) 核となる教科としての国語科としての取り組み

- ① 漢字・語句の意味調べ等を通して、言葉に関する知識を豊かにする。
- ② 国語科として単なる語彙の獲得だけではなく、詩歌の鑑賞、制作、作文等の指導を通して、言葉を豊かにする授業の工夫に取り組む。
- ③ 研究の核となることを意識し、国語科の言語活動例や各学年の目標および内容の系統表を示し、各教科で取り組める言語活動の指針とする。
- ④ I T黒板やデジタル教材を使いビジュアルな授業も工夫し、関心を高める工夫をする。
- ⑤ ワークシートを有効に使い、誰もが分かり、生徒自らが考える授業展開を工夫する。

5) 教科・領域の横断的単元の充実と開発

- ① 今までに取り組んできた、国語・社会の「和歌山宣伝隊」（二年生）、理科・社会の「環境問題を考える」（三年生）、総合・国語の「働くことについて考える」（一年生）、家庭科・保健体育の「食育」等の今までに取り組んできた教科・領域の横断的単元を充実するとともに、新たな単元を構築できないか検討していく。
- ② 3年生の総合的な学習の時間において、1学期は紙芝居作りに取り組み、家庭科（保育領域）・美術科・国語科の横断的単元の確立を目指す。

6) 到達目標の設定

- ・生徒自身が進歩を実感できるように、漢字能力検定等に挑戦させる。
- ・校内においても自分の国語力・語彙力の向上を実感できるような取り組みを 考える。
- ・各種コンクールへ積極的に参加させ、表現力を磨く。

5 指導に生かす評価の研究

生徒一人ひとりの学習状況を適切に評価することが大切であり、学習指導要領に示され目標に照らして、その実現状況を見る評価を一層重視するとともに、生徒の学習状況を客観的に評価し、指導に生かすための評価規準、評価方法等の研究実践に努める。

6 地域との連携

総合的な学習において、校内の人材や情報だけでは学習目的を達成することは困難であり、地域の人材集めや地域の情報収集を地域教育コミュニティの担当者とも連携し、子ども達の学習環境を

整えて行く必要がある。教科の枠を超えて、お互いに個性を発揮し、得意分野を生かしながら、一体となって生徒・地域・教師の連携を強化し、生徒が主体的に学習に取り組める体制を構築する。また、地域の小学校や各公的施設等との連携を図る。

7 情報機器の活用

総合的な学習を進めるにあたって、情報の収集やまとめや発表等の学習場面で情報機器を積極的に活用できるようにするために、情報機器に対する教職員のスキルアップをめざし各種情報機器操作やソフトウェアの操作方法等の研修を進める。また、教科内での活用や効果的な利用方法を研究していく。

また、各教科においてIT機器やデジタル教材を活用し、生徒の関心を喚起し、分かりやすい授業を目指す。